黄色い牙

志茂田景樹

# 色い牙

志茂田景樹

講談社

黄色い牙

定価　九八〇円

第1刷発行　昭和55年4月25日

著　者　志茂田景樹
発行者　野間省一
発行所　株式会社　講談社
〒112　東京都文京区音羽2―12―21
電話　東京(03)945―1111(大代表)
振替　東京8―3930
印刷所　豊国印刷株式会社
製本所　藤沢製本株式会社

落丁本・乱丁本はお取り替えいたします。
© KAGEKI SHIMODA 1980 Printed in Japan

0093-306704-2253（0）　（文2）

# 目次

陽炎の里　5
巻狩りの始末　16
幸玉の契り　31
シカリの継承　50
猟場の敵　74
風雪の彼方　91
鉱山の毒　115
渡り熊　138
冥い平和　157
地割れ　168
旅マタギ　195
吹雪の遭遇　212

装幀　原田維夫

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongboo

# 黄色い牙

# 陽炎の里

露留の里を見おろす露留峠に継憲がさしかかったのは、大正十一年の四月ももうなかばに近いころであった。

鹿石と呼ぶ、鹿がうずくまったような形の岩は、一年前と変りなく、ひっそりと笹に囲まれていた。露留峠の象徴になっている岩で、露留の人々にとって〝鹿石を越える〟と言えば、長い旅を意味した。猟をほとんどしない夏の盛りから秋にかけて、男衆の多くは熊の胆や毛皮の行商に出るが、そのとき、女衆や子らがこの鹿石のところまで見送るならわしは江戸の昔からのものだった。

去年のいまごろ、継憲は総出に近い里の人々にここまで送られて、峠を下った。行商に出たのではない。その前年に徴兵検査を受けた数人の露留の若者のうちで継憲だけに召集令状がきて、秋田市の歩兵十七連隊に入隊するためだった。万歳の連呼に晴れがましい思いで胸を張ったものの、二年の兵役が途方もない長旅の気がして不安に駆られたのを、きのうのことのようにおぼえている。

一ヵ月二ヵ月と家を留守にする行商にしても、行く先の宿はいっしょなので、仲間と離れてひとりぼっちのさみしさはない。露留の人々にとって、行商は獲物を追って何日間も山にこもりきりになる猟とおなじだった。街々は猟場で、売りつくせばまっすぐに里へもどる。

その行商もまだ経験していなかった継憲には、軍隊というようすのわからぬ集団生活そのものよりも、里の人人と二年間も会えないでいる日々を送ることのほうがたいへんな難行苦行に思えたのである。が、案ずるより生むが易しで、ほうぼうから集められた、育ちも仕事もちがう若者たちと肌を接する毎日は、慣れてみると、楽しいことであった。娑婆から隔離された兵営生活なのに、広々として奥行の深い世の中というものが見晴らせた気がした。

またたくまに一年近い月日が経ち、継憲は兵役なかばで除隊できることになった。この年の二月にワシントンで軍縮九ヵ国条約が調印されている。この条約で、日本は陸軍の軍備を制限されたわけではないが、世界的な軍縮気運に影響されて、一部連隊の規模を縮小した。軍縮除隊、と言われたものがこれで、継憲は運よくそのおこぼれにあずかったのである。

継憲は、鹿石に片足をかけ、ひさしぶりに見る生まれ故郷に目を細めた。

露留の里は、せまいが、すり鉢状に展けたあかるい盆地に、藁屋根をのどかに点在させ、桃源境の趣きだった。家々の庭先からはじまる、自給自足用の段畑の縁々が幾何学模様を織りなし、段畑の切れた灌木と草の繁みからは時期おくれの焼畑の煙が二筋、たちのぼっている。一軒、藁屋根を葺きかえてまもない家の庭で、辛夷の白い花が中天にかかった日に映えて濃艶な輝きを放っていた。

そこが継憲の家である。陽光をいっぱいに受けた峠の斜面に陽炎が立ち、それを通して見る故郷はうららかに揺れて、ふわっといまにも浮きあがりそうだった。

継憲は、峠へ吹きあがってくる、かすかな風に、天保年間に建って梁も柱もつやつやと黒光りしたわが家の匂いを嗅いだ気がして、大きく深呼吸した。それから、一気に駆け下りたい気持ちをおさえて、里を屏風のようにとり囲んでいる、深く沢が切れこんだ部分や日陰の山腹にたっぷりと雪を抱いた峰々に目をやった。

里は春でも、山々からは冬はまだ立ち去れないでいる。南西に根烈岳がごっつい山容を見せて迫り、その肩越しはるかにすっぽりと雪をかぶった太平山の頂きが見える。根烈岳から太平山にかけて重畳と伸び連なる峰々が、露留の人々の猟場だった。

早目に冬眠から醒めて雪渓を歩きはじめた熊を狩るために、父の継三郎は男衆を率いて猟場のどこかに入っているはずである。継三郎は、露留マタギの統領をしていた。

南から東にかけても、雪消の部分を黒く見せた山々がせめぎあうように奥行深く連なり、ほぼ真東にこの地方では最高峰の森吉山がなだらかな稜線を周囲の山々から浮きあがらせてそびえている。

奥羽山脈の脊梁部が出羽丘陵と合して、山々の尾根が樹枝のように入り組んだ、この地域は阿仁と呼ばれ、山の深い秋田県の北東部でも、もっとも険阻な山岳地帯となっている。山懐に申しわけのように覗く猫の額ほどの平地に、根子、比立内、打当といったマタギの小集落があり、露留もそのひとつである。

他地域の人間は、これらの集落のマタギを総称して、阿仁マタギと呼んでいる。

この山深いマタギの国は、反面、阿仁銅として知られる銅の産地でもあった。森吉山の西側一帯に森吉山の分峰のように連なる小ぶりの山々は、旧藩時代から秋田藩佐竹氏の銅山となっており、その山裾に沿って北へ流れる阿仁川の東側に、銅山の町、阿仁合がある。阿仁銅山は、明治八年に工部省鉱山寮の経営となり、同十八年に民間資本に払いさげられて民営に移った。旧藩時代に倍して活発な採鉱が行なわれ、阿仁合の町は年々にぎわ

い、六年前の大正五年に人口一万二千人という最盛期を迎えた。

阿仁合の上流にある荒瀬、萱草といった集落にも銅山景気がおよび、阿仁川支流に沿ったマタギの里である比立内、打当にも先祖からのマタギを捨てて鉱夫になる者が出た。

が、馬も牛も通れない沢道や原生林の崖道を通っていかなければ入れない根子や露留の人々は、銅山の発展とは無縁に、マタギとしての習俗と狩猟法を墨守して生きてきた。とりわけ、奥深いところにある露留では、二十三戸の全戸が一組の狩猟集団にまとまり、塩と慶事に食べる米のほかはいっさい自足していると言ってよいほど、かたくなに隔絶した生活を営んでいる。

峰々に感慨深げに目を這わしていた継憲の表情が、不意に険しくなった。根烈岳の背後に見える山の中腹が伐採されているのに気づいたからだった。根烈岳の陰になって一部しか見えないが、ごっそりと伐採されているようである。

熊を狩る手慣らし足慣らしにウサギを狩る山だが、ブナの大木が多く、毎冬のように熊が入る洞を根元に持った木も何本かあった。阿仁の原生林に営林署の斧が入ったのは、もう明治の末からのことだが、とうとう露留の身近の猟場にまできたか、と継憲は胸が痛んだ。

猟ができるのは、ブナ、イタヤ、トチといった落葉樹の原生林があるからなのである。こうした落葉広葉樹は、熊の好物の実をつける。山ブドウやアケビといった灌木も、いっしょに繁らせる。伐採した後には杉が植えられることになるが、たとえ何十年経っても、杉林は熊の好む木の実を降らせず、常緑の枝繁みは一年中、陽光をさえぎって下草でさえも思うように生やさせない。熊にとっては死の林であり、ひいてはマタギにとっても無価値の林でしかない。

継憲は、故郷の土を踏むなつかしさと、猟場を伐採されたことに顔を土足で踏みつけられたような屈辱とを胸にこみあげさせて、峠を下った。その屈辱は、代々のほとんどがシカリを勤めたという色濃いマタギの血のたぎりだったかもしれない。

土間に入ると、生後二ヵ月ぐらいのマタギ犬の仔に吠えかけられた。マタギ犬は秋田犬の原種と言われ、芝犬ぐらいの中型犬である。この仔犬は毛の色がふつうのマタギ犬に比べて黒ずんで、焦げ茶色だった。

継憲が、しっしっと叱りつけながら足でいなしていると、声がかかった。

「――継憲でねえか。いづ、もどった？」

山に入っているとばかり思っていた継三郎が、囲炉裏のある板敷の部屋にのっそりと立って、目を丸くしてい

る。その表情からすると、継憲が秋田市でうった電報はまだ届いておらず、除隊を知らなかったらしい。
陸の孤島である露留へは、新聞も郵便も五日に一度しか配達されず、電報も二日三日かかることがめずらしくない。
「陸軍二等兵、佐藤継憲。昨日、除隊になりまして、ただいまもどりました」
継憲は、気をつけの姿勢をとり、挙手して軍隊口調で言うと、続けた。
「ちっとも変んねな。電報うっだども、おれのほうが早いんだがら。軍縮除隊で、一年早く帰れたす」
「軍縮除隊？　そう言えばそんだらごと、三日前にきた阿仁合の郵便屋が話でったな。日本じゅうで、ずいぶん兵隊の数さすぐなぐなるだど」
継三郎はマタギ特有の深い皺の刻まれた顔に喜色を広げたが、目はじろじろと息子を見おろしている。
「この洋服だば、どうも着づらくていげね」
継憲は、着ている背広の襟をつかんで照れた。その背広は、継憲に召集令状がきてから、継三郎が阿仁合で買ってもどったつるしのものである。町場の人間に負けない仕度で入隊を、という親心からだったが、除隊の日までは用のない私服に新調のものを着てくる者はなく、かえって継憲はバツのわるい思いをした。
入隊と除隊で二回、袖を通したきりの、この洋服も、もう二度と着ることはないにちがいなかった。マタギに洋服は無縁のしろものである。
「おめ、一年見ねまにずいぶん体さでけぐなったな」
継三郎は、肩も窮屈で前ボタンもかからず、両の袖も短くなっている背広に、息子の思いがけない成長を知っておどろいていたのだった。継憲は、一年の軍隊生活で背が一寸五分、伸び、体重も二貫強ふえ、五尺八寸、十九貫の堂々たる体格になっている。成人してから背が伸びたのは、晩生のたちだったからだろう。
「――まず、あがるべし。あがって山神さんに参るべし」
言って、継三郎は奥の部屋へ入った。
雪の沢道を歩いて雪がくっついた長靴を脱いで、継憲は板の間にあがった。囲炉裏には薪ストーブが置かれており、その上に無造作に熊の頭を吊るしてある。まだ撃ち捕ってまがないようだった。こうして少し乾燥させたあと、米糠に入れて蒸焼きにする。粉末にしたものを、脳病の薬として売るのである。
板戸や壁には、ところきらわず、熊をはじめ、貂、ムジナ（タヌキ）、バンドリ（ムササビ）、マミ（穴熊）などの毛皮がかけてあった。台所のほうから、熊の臓物の匂いもただよってくる。



试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongboo

慣れてしまえばなんでもないマタギの家にこもる匂いが、継憲の胸にあらためてわが家へもどったという実感をこみあげさせた。

奥は畳の部屋で、神棚に薄い杉板でつくった、ちいさな鳥居がある。なかに祀ってある神体は、いつの世のものかわからない、荒挽きされたコケシの木地のような山神である。これの本体が里を流れる露留川のそばに山神神社としてあって、里の人々に篤く信仰されている。

打当、比立内の里では山神さまと呼ばれている山神は、阿仁マタギのあいだでは女性神だと信じられている。森吉山に住んで阿仁の山々をすべて支配し、マタギの衆に獲物を授け、災難を未然に防いでくれる、とされている。

継憲は柏手を音高くうって、拝んだ。

右の寝間との境の鴨居に、柄が二メートルはある熊槍がかけてある。穂は両刃で根元が筒状になって、柄にはめこんである。鉄砲猟がふつうになったいまでも、マタギは銃を背負ったほかに、このタテを持つ。継三郎はタテ一本だけで熊を十数頭も仕止めており、そうした熊の血を吸ってきた穂先は磨いてあっても脂で曇っていた。

継憲は寝間の仏壇にも行って、入隊の一ヵ月ほど前に亡くなった母の位牌に線香をあげた。兄はひとりいたが、十何年も前に肺炎で死に、いまは父ひとり子ひとりである。

父と子は板の間へもどると熊の敷皮へ坐り、ストーブで暖をとった。

「――春山（春の熊狩り）はじまってるべ。なして行がねんだ？」

気になっていたことを、継憲は訊いた。

「風邪さながながぬげねんだ。体の調子さえいいんだば、こんな楽してるわげにいがね」

継三郎は無理につくった笑いを浮かべ、継憲の前に出した湯呑みに酒を注ぎ、自分の湯呑みにも注いだ。

「兵隊さ行っでぎて、おめも一人前になっだなあ。ばば（妻）が生ぎてだら、泣いてよろこぶべ。まず、やるべし」

継三郎は湯呑みをさしあげ、継憲がそうするのを待ってから口に運んだ。氷水のように冷えた、その酒は飲むと、喉を刺すようにしみさせて、食道へ流れるのがはっきりとわかった。それを快く思いながらも、継憲は父の顔が一年前より黒ずんでかさかさしており、綿の筒袖の上にムジナの毛皮でつくった袖なしを着こんだ上体もひとまわりちいさくなっているようなのが気がかりだった。

「シカリのかわり、だれさやっでる？」

「長五郎だ。あいづだばちゃんとムカイマッテやるべ」

「甚一さんでねえのか？」
「あいづはこの正月に死んだ。胃さやられでで、桶いっぱいの血ば吐いてなあ。おめには知らせながったども、安吉も去年の秋に死んでるど」
「なら、長五郎さんしかいねな」
組でやる猟は、シカリの統制下、射手（ブッパ）と勢子（セコ）に分かれてやるきまりで、老練なマタギが見通しのきく場所に立って指揮をとる。この指揮者のことをムカイマッテと呼び、ふつうにはシカリが勤める。
シカリがなにかの事情で山入りできないときには、ほかの有力なマタギがやらなければならないが、安吉も甚一も死んでしまっては長五郎しかやれないかもしれない。継憲は父の老いたようすや、ふたりの老練なマタギの死に、マタギの里をあけた一年が五年にも十年にも思えた。
「――さっき峠がら見だども、根烈（岳）の西山さ伐採やってるべ」
「ああ、やってる。森吉（山）や富沢森になんど、もっとひでえどいうぞ。おおぜえ人夫が入（え）るで、熊は逃げる。銅山の連中も入って、あちこちやがましくほじぐるがら、バンドリもテンも仙北（郡）さ逃げてしまった、と打当のマタギは嘆てだ。ことしの寒マタギでは、熊はとうとう一頭も捕れながったらしい」
継三郎は、湯呑みの酒を苦そうに飲んだ。
一、二月にやる猟を寒マタギと言い、この時期は熊が冬眠中なので、ウサギ、ムジナ、テン、ヤマドリなどを主に捕ることになる。が、熊穴を見つけると穴から追い立てて捕ることも多く、寒マタギ中にどこの里でも二、三頭は捕っている。
森吉山一帯を縄張りにしている打当で寒マタギの熊の獲物がなかったのは、伐採が進められているせいもあるが、阿仁銅山が新坑を開発するため、山中で活発に探鉱をしている影響のほうが強いという。阿仁銅山は大正五年に空前の産出量を見てからは、年々、落ちこんでおり、探鉱に力を入れているのだった。
「打当ばかりでねえ。露留でも熊だげでなく、どれもこれも獲物の数は少くなってる。獲物がよそさ逃げでるうぢはええんだども、いまに猟場が荒れで、いねぐなるなあ」
「それも時代ってもんだべ。しがたね」
「おめえみてえた若（わけ）え者が言うごとか！」
継三郎は、きつい口調で言って、継憲をにらみつけた。話のはずみで軽く言ったつもりの継憲は、父の褐色の眸（め）に炎（ほのら）のような怒りが宿ったのを認めて、胸を衝かれた。以前は、ものにこだわる父ではなかった。掟にはきびしくても、公平に人に接し、露留の人々は老若男女を

問わず心服していた。

老いからくる気の弱まりですぐに怒りっぽくなった、とも言えるが、露留の行末が見えて息子の自分にこれからは安閑としておれないぞと覚悟を求めたのかもしれない、と継憲は思った。継三郎は目を伏せて、湯呑みの酒をすすると、祝うべ、と言った。

「おめが無事、兵隊からもどった日だ。春山の最中で祝いごとは禁物だども、手伝いさきてもらうくれえだば許されんべ。熊鍋で兵隊の疲れをとってもらうべ」

継三郎は、料理の手伝いをたのみにいくのか、外へ出ていった。毛色の黒ずんだ、さっきの仔犬があとを追った。

男衆が山入りしているときは、留守の人々は他家の祝儀の席に招ばれて飲食してはいけないことになっている。お産のときも、手伝いに行ってはならない。留守を守るマタギの家族の禁忌は数えきれないほどにあり、それもきびしいもので、一例をあげると、留守家族にお産や死人があっても知らせにいってはならない、というのがある。女性神である山神が山に妻や娘が入ると嫉妬するからと言われているが、ほんとうのところは険しい山へ息急き切って知らせに入って遭難してはならない、という心得から生まれた生活の知恵なのだろう。

継三郎は、男世帯で料理の仕度ができないから女衆にきてもらうという口実で、じっさいはひとり息子の継憲の帰郷をささやかに祝いたいらしかった。

いちばん近い隣家の長五郎宅から長五郎の妻のカメと娘の八重を連れて、継三郎はもどった。長五郎は、片道十里の道のりで、マタギのなかの足達者でも一泊かけて往復する奥羽線鷹ノ巣駅までを一日で行ってこれる。異名を、風の長五郎、と言うのは、そのためである。マタギには、ときどき、こういう豪の者が出て、しばらく前にも、他の里に手癖のわるいマタギがいて、毎晩、秋田市に盗みにいって、夜のあけきらないうちにもどってくるのがいた。阿仁から秋田市までは山越えの連続で、十二里前後はある。盗品から足がついて捕まり、いまは監獄に入れられているが、はじめ、警察でもこのマタギを犯人だとなかなか信じられないで弱ったという。

そんな天狗のような足達者なのに、長五郎は子どもにはあまり恵まれなかった。八重の上にも下にも何人ずつかいたのだが、みんな幼くして死んでしまった。いまは子ひとりである点は、継三郎とおなじだった。

八重は土間に入ってきて、継憲をひと目見るなり、顔を赤らめた。雪国の娘の肌は、春先にはみずみずしく白くて、赤らむと残雪にこぼれた地桜（イワカガミ）の、淡紅色をした花片のように見える。

「――お帰んなさい」
と、言って、八重はうつむいた。
「帰ってみだら、浦島太郎になっていだ。んだども、八重ちゃんよ、きれえになっただなあ」
「いや」
八重は、手に持っていた野菜を落としそうになりながら、台所へ駆けこんでしまった。
去年、みんなといっしょに鹿石まで見送ってくれたときにはやせぎすで顔つきもきつかったのに、いま見た八重は全体にふっくらした感じが出て、ほのかに匂うような色気があった。年は三つ下だが、いっしょに裸で川遊びしたこともある幼なじみが見せたはじらいに、継憲はおもはゆさをおぼえながら、背広のポケットに手を突っこんで、丸い鉛の弾をいじった。それは火縄銃の弾で、八重の曾祖父が大熊を射止めたあと、その心臓から抜いたものだという。阿仁のマタギはそれぞれの家に旧藩時代から伝わる、獲物から抜きとった鉛の弾を幸玉と称し、豊猟をもたらし身を護ってくれるとして、好んで肌身につけている。
八重はその幸玉を、ほかの見送り人に目立たぬよう、峠の途中でそっと手渡してくれたのだった。お守り札のかわりにしてほしい、ということだったのだろう。
そのときのことを思い浮かべて、継憲は不意にもうひとりの娘の顔を脳裏によみがえらせた。きのう、除隊して秋田駅に着く途中で立ち寄った、ちいさな郵便局の窓口にいた娘の顔である。
電報をうつ手続きがすむあいだ、その娘のよどみない受け答えや、頼信紙をとりあつかう手の仕種に、継憲は町の娘の闊達な生き方を見た気がして、まぶしい思いになった。愛くるしいが、一点、涼しげできついものを秘めた双眸と、艶やかに白い、しっとりとした頬が印象的であった。
「えーと、ジョタイ　シタ　スグカヘル　ツグノリ。これだげでいいんですが？」
ちびた赤鉛筆で電文を追って娘は顔をあげると、じっと見つめていた継憲の視線に気づいて一瞬、白い頬をこわばらせた。継憲が少しどぎまぎして目を頼信紙にやると、勝気な感じの笑みを浮かべて、
「いいんですが？」
と、重ねて訊いた。
「いんです。お願えします」
「はい」
と、短く答えた、軽やかな声が、継憲の頭の奥で鳴るように響き渡った。
郵便局を出てちょっと歩いたところで、追いかけてきた、その娘に呼びとめられた。電報料金の計算をまちが

えて多くとりすぎたと言って、小銭を返してくれたのである。
「すいません。これでまちげないと思いますけど」
硬貨を乗せた、ふっくらした掌のなかに幸玉があった。受けようとした継憲の手が止まり、目がその幸玉に行ったのに気づいて、
「窓口の台にあったす。墓口からお札、出しなさっだとき、こぼれだんでないですが」
と、さっき見せた笑みをまた浮かべた。
「そうすが。どうも」
「これ、なんですが？」
思いがけず気安げに訊かれて、継憲は不意を衝かれた感じに照れ、ぶっきらぼうな固い口調で、
「なんでもねえもんです。他人(ひと)には関係ねえもんです」
と、答えた。怒ったように聞こえたのか、娘は笑みを消して、
「じゃ」
と、掌の小銭と幸玉を継憲の手にこぼすふうに渡した。そのとき、継憲の指が娘の指先を絡めてしまい、継憲は思わず不自然なほどぎごちなく手をひっこめた。硬貨と幸玉が道にこぼれて、幸玉のほうはころころと多少、勾配した道の端へ転がった。
「あらっ」
と、娘は高い声をあげると、幸玉をあわてて追おうとして、足を踏み出したはずみにすべらせて転倒した。前の家が拭き掃除の水でも捨てたのか、そこは少しぬかるんでいたのである。
「あぶねな。だいじょぶすが？」
継憲は娘を助け起こしたが、夢中だったせいで娘の右の脇に添えた左手がずれて乳房のあたりを強くおさえてしまった。固い弾力のあるふくらみが掌を押してくる感じであった。継憲は、また前のようにぎごちなく手をひいた。娘は、きょとんとした表情になって、つかのま、継憲を見たあと、なにも言わずに背を向けると、一散に郵便局へ駆けていった。
背を向ける前、白い、その頬がほの赤く染まったことに、継憲は後味のよい、よろこびのこもったこだわりを抱いて、しばらくは金縛りにあったように立ちつくしていた。
追ってきてから道を駆け出していくまでのあいだは、いま考えれば、ほんの短い時間のことであった。が、その間に見せた娘の表情はいくつにも分かれて、くっきりと継憲の脳裏に刻まれている。
ストーブに大きな土鍋がかけられ、肉のついた背骨を荒っぽくナタで割っただけのものが放りこまれた。この背骨肉のことをナガセと言い、ナガセ汁はいくつかある

熊鍋のなかでも、もっともマタギが好むものである。二時間近く煮て、箸でつまんで肉が骨からほろっとはがれるほどになると、カメが大根、ネギ、コンニャクを大づかみに入れていった。ころあいを見はからって、八重がしゃもじにすくった味噌を入れて溶かした。

里でつくる素朴な赤味噌に、骨の髄からしみだした汁がねっとりと溶けあって、たちのぼる湯気に濃い匂いがこもった。

「——さあ、食べるべし」

と、カメが言った。

継憲は、ひと口、肉を口に入れて、はじめ、その味になつかしさよりも違和感がきて、軍隊時代の食生活がマタギのそれとはほど遠いものであったことを知らされた。が、たちまちに舌は熊肉になじみ、むさぼるように食べだした。継三郎は、息子の健啖ぶりに安心したようだったが、自分はあまり箸を鍋に運ばなかった。

カメと八重が一度も箸をつけないでいるのは、他家に招ばれて飲食をしないという留守の禁忌を守っているのである。ふたりとも、寝起きのように乱れた髪をして、まったく化粧つけがなかった。留守中の妻が髪を結ったり、化粧をしたり、新しい着物を着ることも禁忌になっているからであった。

「前にシカリがら聞いたことだども、継憲さん、軍隊で鉄砲撃ちさいちばんうまがったって？」

カメが野菜を追加しながら、訊いた。

「去年の秋、連隊の射撃大会で一等とっだすが、てえしたことでねえす」

「はア、ひっごむごとはねえ。露留の名誉だで、八重もよろこんだでや」

カメは、おどけて言って継三郎を見た。

「マタギだば一等とってあたりめだべ。継憲の腕前では、まだまだ飛んでるヤマドリに一発撃っても落っこぢでこね。鉄砲の腕だば、まだ辰吉のほうが上いってるなあ」

継三郎は、首を振った。

辰吉は、正月に死んだ甚一の長男で、継憲と同年である。ちいさいときからよく遊びもし喧嘩もしたが、負けん気が強いくせに弱い者いじめをする癖があり、変にこすいところもあって、継憲は好きになれなかった。と言うより、辰吉のほうで、継憲がシカリの子であることにこだわり、ことごとに反感を見せてきたふしがある。

マタギは、ふつう、よそ者とは通婚しないが、おなじ里に適当な相手がいないときには近くにある他のマタギの里から嫁をとったり、そこへ嫁に出したりする。マタギの血を維持するためと血族婚の重なりによる弊害を防ぐために、古くから守られてきたことで、このしきたり



试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongboo